

連載講座

第20回

戦国消防組合・毛利元就

作家 童門冬二

火災に地域豪族の共同組合

戦国時代は“弱肉強食”の時代だといわれる。つまり力の強い者が勝ち、弱い者は負ける。では、いったいなにを得ようとして争ったのだろうか。端的に言えば“土地と農民”である。“一所懸命”という言葉が示すように、とくに戦国時代は土地争いの戦闘が多かった。合戦の目的はほとんどが「他人の土地とそれを耕す農民」の奪い合いだ。毛利元就はこういう現象をみていて考えた。それは単に土地争いだけではなく、その土地で起こった災害などの処理についても、地域に分散している豪族（地侍）は苦しんでいた。とくに火災などが起こっても、大規模になったときには手に負えない。つまり、

「その豪族だけでは消すことができない」

という現象を生じていた。このころ元就が生まれた安芸国（広島県）の地域には、よく農民が一揆を起こした。年貢が重いからだ。つまり反税闘争である。そのとき農民たちは“カラカサ連合”というのをつくった。これは雨具であるカラカサを広げたときに、芯を中心に放射線状に竹の骨が円形に突き出る。農民たちは、この円形を利用してまるでカラカサの骨の上に名前を書くように自分の名を書いて連判状をつくった。これはいままでの縦書きにすると、必ず先頭に名を書いた庄屋や名主などの村の責任者が、みせしめのために礫

にされたからである。農民にすれば、

「われわれの要求を通してくださったのに、みせしめのために礫にされてしまった。お気の毒だ。これからは、だれが頭で尻尾だかわからないようにしよう」

と考えて、円形の連判状を考え出したのである。苦肉の策であった。元就はこれに眼をつけた。このころの中国地方では、西の大内氏、北の尼子氏が大勢力で、現在でいえば“M&A（合併と買収）”をしきりにおこなっていた。元就が考えたのは、「このカラカサ連合を応用して、地域豪族の組合をつくれば、お互いに協同しておこなわなければいけない仕事の処理もできるし、同時にまた、大内氏や尼子氏のM&Aにも対抗することができる」

ということであった。しかしいきなり、「大内氏や尼子氏に対抗するためにカラカサ連合をつくろう」などといい出しても、豪族によってはひそかに心の中で、大内氏に味方しようとか尼子氏の支配下に入ろうなどと考えている連中もいる。そういう政治的な目的をさておいて、元就はそこでまず、「火災時に協同してこれを消して止める組合をつくろうではないか」

と呼びかけた。豪族の多くがとびついてきた。かれらも火災が起こったときとくに火元が他の豪族であったときには迷惑限りない。しかし放っておくわけにはいかない。元就の申し出は渡りに船

だった。会議がおこなわれた。元就が議長となって申し合わせをした。

- ・ 連合に参加した者は、極力失火に注意し、火元にならないように努力する
- ・ それでも、火が出たときとくに他地域に類焼したときは、ちょうど火元と火を受けた地域とが協同して消火につとめる
- ・ そのために必要な作業員は、それぞれが努力して提供する
- ・ 関連する費用はそれぞれが話し合いで分担する

などということである。とくに最初の、「極力火を出さないようにお互いに努力する」という項目は、参加者たちの賛成を得た。これは元就の狙いが、

「火を出さないということは、出さないように普段から緊張するということだ。緊張の底には当然、火を出したら他に迷惑がかかるという道徳的な考えを持たなければならない。したがって、火を出さないということに努力するということは、そういう精神的な責任も負うということだ」

という、一種の“地域教育”の役割も果たせると思ったからである。現在でいえば市町村が結成している「一部事務組合」のようなものだ。

地域自治の実現

戦国時代は、中央政治がほとんど成立していないから、地方における豪族はいわば“小さな地方自治体”とっていい。豪族はそのまま首長になる。が、お互いに前にかいた弱肉強食をおこなっていたから、地域同士の信頼感がなかなか持てな

い。自分以外はすべて敵だという考えが一般化していた。それを元就は、

「それぞれの自治力（自主性）を尊重しつつも、ある仕事については協同でこれを処理する」

という提案をしたのである。とくに火災はだれしもが恐れることだったから“カラカサ連合”の結成は容易だった。

こうして、お互いの協同精神が培養され、豪族たちも、火災の消火をきっかけにお互いに手をつなぐようになった。そして、この発展が元就の狙った、

「大内氏や尼子氏のM&Aに対抗する」

ということまで発展した。カラカサ連合の力は強く、やがては逆に連合の力がものをいって、毛利元就が先頭に立って大内氏がほろぼされ、やがて尼子氏も拠点から追放されてしまった。山陽山陰地方の二大勢力は、この小さな豪族の寄り集まりであったカラカサ連合によって、消滅してしまっただけである。

元就は連合を大いに活用して、出身地の安芸国（広島県）を拠点に、現在の山口県・島根県・鳥取県・岡山県・兵庫県の大半・四国の瀬戸内海側・北九州などに勢力を及ぼした。現在の制度でいえば、

「道州制を戦国時代に実現した」

とっていいだろう。

かれのつくった“カラカサ連合”の初心である、「火災をはじめとする地域の問題は、地域の協同によって処理しよう」

という自治精神は現在も生きている。また生かさなければならぬ。